

発行所
天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)

電話 66-1311
FAX 66-1314

かさおか



龍（鯉は滝を登り龍と化す）

初代の心にかえり信仰の喜びを

深めよう 伝えよう 広げよう

- 一、持ち場立場で日々理作り
- 一、家族揃って教会参拝
- 一、一日一件にをいがけ

立教174年
5月号

育ち、育てる努力を！

婦人会第93回総会

5月1日付、天理時報で既報の通り去る4月19日、婦人会第93回総会が親里で開催され、全国の内外から約5万700人の会員が参集、真柱様のお言葉、中山はるえ婦人会長のあいさつを受けた。昨年、創立100周年の節目を迎え、今年は新たな一歩を踏み出す総会となった。午後からは記念行事として「支部の集い」が支部ごとに行われた。

笠岡支部(上原きよ枝支部長)は、午後0時10分から詰所講堂で345人が参加して「支部の集い」を行った。これは総会での真柱様のお言葉、婦人会長のあいさつを受けて、婦人会員としての今後の歩みを話し合おう



支部長のあいさつを熱心に聞く参加者

というもの。

参加者を8-10人の32班に分け、各班の進行係を中心に活発な話し合いがもたれた。

この後、上原きよ枝同支部長は「婦人会は昨年、創立100周年という大きな節目の年を通して頂いたが、次の100年後に向けてどれだけ成人を進めさせて頂くことが出来るかということが大切な目だと思う。今日の会長様のあいさつは、先般の東日本大震災における会長様の思いを聞かせて下さったと思う。真柱様からは、よふぼくとして、よふぼくはどうあるべきなのかという基本の話をお聞かせて頂いた様に思う。

今日、お聞き頂いた話を今、皆さんで話し合って頂きました。心に残ったこと、気づかせて頂いたこと、こう変ったらいいんだなあと感じたことを、それぞれの日々の目標にして来年、総会を迎えさせて頂くまでの成人の台にして頂きたい」とあいさつ。

道の台として、実のあるよふぼくに育つ努力を誓い合い閉会した。参加者全員に、バック入

大教会本年心定め

- 初 席 者 数 279人(28人)
 - よ ぶ ぼ く 数 217人(16人)
 - 修養科修了者数 135人(1人)
 - 教人登録者数 114人(0人)
 - 参考) 教人資格講習会 (1人)
 - 教会長資格検定講習会 (3人)
- (括弧内は1月1日~4月30日)

記念祭までに心定めを完遂するよう
つとめさせて頂きましょう



りの大福と桜餅、大教会創立120周年記念祭の日時、スローガン入りのティッシュペーパーが配られた。

第93回婦人会総会 記念行事

「支部のつどい」を開催して

婦人会笠岡支部では本部での第93回婦人会総会に引き続き、笠岡詰所で「支部のつどい」を開催させて頂きました。日頃なかなか直接聞く事のできない会員さん達の声を一言でも聞かせてもらいたいという支部長様の思いから「はなしあい」の場を持たせて頂きました。

10人ずつぐらいの班に分れて、婦人会総会での真柱様・婦人会長様のお話を聞いてどんな事を思われたか、参加者全員にはなしをしてもらいました。

人前で話すのは苦手だから…という方もおられました。円になって司会者を中心に和気あいあいとはなしあいができたと感じます。

はなしあい終了後、支部長様は「今日の真柱様・婦人会長様のお話を来年の総会までの行いの糧とし、親神様の親心をたずねさせて頂く苦心をさせて頂き、その中大教会の創立120周年記念祭を迎えさせて頂きましょう。」とお話し下さいました。

バスが大渋滞にまき込まれて詰所に帰れない…という団体もありましたが、支部長様のお話には何とか間に合って、しっかりと支部長様の思いを聞かせて頂きました。

最後に昨年の婦人会よろこび広場で好評だった「和菓子」をお土産として持って帰って頂きました。(笠岡支部常任委員 岡崎和美)

婦人会総会に参加させて頂いて

木津和委員部 丸山 哲子

「ゴロゴロゴロッ」「ゴロゴロゴロッ」

大きな雷の音が中庭の空に響き渡りました。今年の婦人会総会式典での事です。今年の婦人会総会、皆さんはどの様な気持ちで迎えられましたことでしょうか？ 昨年は皆様御承知の様に「婦人会創立百周年」という大変意義深い年にあたり、——三年千日——と仕切って頂いて、それぞれに歩ませて頂きました。私事ではございますが、昨年春、主人の会長就任、長

男の教校学園入学、そしてこの婦人会百周年と、三つもあり難い事が春に続き、忙しい中にも本当に有り難い幸せな春でした。あれから一年——今回の婦人会総会式典の途中、私は去年の幸せな気分を思い出し、そしてこの間の気のゆるみを感じた次第です。「そこがゴールではない、あくまでそこは通過地点で、特に百周年のあとは、また一からはじめさせて頂くという



進行係を中心に活発な話し合いが行われた

心がまえが大切」大きな行事のあとは、つい気分がゆるんでしまいます。やはり心なしか、おぢばの風景も沸きに沸いた昨年を思い浮かべると、少しさびしかったと思うのは、私だけででしょうか？ 真柱様からは今回「用木としての心のあり方」又、常々「女性としての徳分」をよくお聞かせ頂いております。又この度の東日本大震災——被災にあつた人だけでなく、すべての人類に対してのぞねんであると、大教会長様は、会議の度ごとにお聞かせ下さいます。あの大きな雷の音、そしてあの雨、風の天候は、きっと「おだやかな事ばかりでない、婦人会に対しての親神様・教祖からの叱咤激励」のお天気であつたのだと思わせて頂きました。

婦人会の皆様、女性である私達にだけ頂いている徳分を生かして、共々にがんばらせて頂きましょう。そして次の婦人会総会を、それぞれどんな風にむかえさせて頂けますでしょうか、それを楽しみにしながら…。

温故知新

いきいきエピソード

二代会長は力持ち

兄である四代会長に聴いた話であるが、笠岡港には力石というのがあって、浜の漁師や浜仲仕がグループに分かれて力を競いあってきたが、二代会長は偶々ある時その様を見て、飛び入りで入っていった、石を纏って廻して漁師や仲仕を驚かせたそうである。

私が大教会史の編纂に取り掛かった頃、力石は住吉港の二階建の建物の板壁の傍らに置いてあったが、今は笠岡市の郷土資料館の入口に並べて置いてある。鎖で固定してあるが、ちょっとやそっとでは動きそうにないので、鎖は要らないのではと思うのだが。

ネットで調べてみると、「笠岡港の力石」の項目で、「笠岡市立郷土館の前庭に置かれている16個の力石が、文化財に指定されている。江戸時代、寄港した帆船に物資を船積み・荷揚げする浜仲仕が、この石をかつぐことで体と精神

力を試し、給金などを決めていたという。大正末期まで、笠岡港の浜仲仕は東浜組と西浜組の二つのグループに分かれていた。最も重い力石は200キログラム以上の重さがあり、持ち上げた人の名前や江戸時代の年号などが刻まれている。」と。

力石の起源は石占で、神社、寺院に置かれた特定の石を持ち上げて重いと感じるか軽いと感ずるかによって吉凶を占ったという事で、それがだんだんと鍛錬と娯楽に用いられるようになり、江戸時代から明治時代まで盛んに行われた。恐らく二代会長は高知にいる時、高知の港でよく経験していて、偶々笠岡港でその様を見て仲間に加わったのであろうと思われる。

二代会長のこの頑健な身体と力が発揮されたのは、明治二十七年、笠岡支教会へ本席様が御入り込み下されて、高知大教会へ向かわれる道中の事であった。

四月十日、本席様御一行は笠岡支教会(笠岡の元の教育施設敬業館)に一泊され、翌日二代会長も一行に加えて頂き、四国に渡り十三日には、吉野川を越して阿波池田の対岸・白知に到

着された。ここから本席様は繁藤支教会差し回しの迎え駕籠をお召しいただいたが、前後を担がせて頂いたのは、高知初代でもあり実兄でもある島村菊太郎先生と上原伊助笠岡二代会長であった。二人は右と左の肩違いであり、随分難儀であったと思われるが、繁藤に到着するまでの十五里、約六十キロを担ぎ通されたという。

私は先日愛媛の石鎚山に登ったが、道中、車で登山口まで入った。瀬戸内側から一度壱千メートルの手前の山の頂きまでつづら折りの山道を上がり、それを石鎚の麓まで降りる。そして再び石鎚山の登山口まで又上がる。南北からの力により褶曲した四国の山々の構造上、瀬戸内から高知側に抜けるには、この登り降りを繰り返さねばならない。しかも山道はつづら折りである。さっき登ってきた道がほんの五、六メートル下の樹林の中に見えるのは、割合精神的にしんどいものである。

白知からの吉野川沿いの道は、大歩危小歩危の難所もあり、七歳違いの島村兄弟にとっては、土佐っぴに相応しい栄光であったと思われる。繁藤に到着したとき、二人の肩は大きく腫れ上がっていたという。

(笠岡史料部長)

東日本大震災 救援活動ルポ

笠岡大教会災害救援委員会では、3月の月次祭より募っていた災害救援物資を、被災地福島県いわき市に輸送。加えて、現地でのひのきしんを行った。

4月12～15日の救援活動に参加したのは、以下の7名(上原志郎・虫明立生・渡邊泰造・山田睦浩・谷本光司・上原繁次・中村剛史)。

出発前日の11日と出発2時間前に、目的地いわき市は、震度6の余震におそわれ、高速道路の通行止め・土砂崩れ・断水・一部停電という状況であった。また、余震の回数も増えていた時期でもあった。

出発の直前、大きな危険を伴う中、行かせてもらうかどうかを、今一度7名で話し合った。そして、「全て神様にお任せして、笠岡のみなさんの思いが詰まった物資を、届けるだけでも行かせてもらおう!」と、心が一つになり、一路いわき市へと向かった。

マイクロバスに救援物資、食料・水・軽油などを積み込み、新潟経由で15時間かけ現地へ到着。現地では、安斉美代子いわき布教所長をはじめ、布

教所につながる方々が、物資の受け入れ先、作業場所、食事、宿泊などの世話取りに当たってくださった。

一行は、瓦礫の山が広がる町並みを通り、地元自治会の方へ挨拶をするため、避難所へ赴いた。そこでは、地元江名地区の区長さんから、避難されている方々の心境、避難所の雰囲気、作業内容などを聞かせていただいた。

その後、被災者87人を受け入れている、介護老人福祉施設「望洋荘」に、救援物資を届けさせていただいた。真実のこもった物資に、職員の方は大変感激され、特に少年会員らで折った千羽鶴と、復興への応援メッセージを記したノートを渡す際には、目頭が熱くなっていた方もおられた。

また、特に津波の被害がひどく、家族を失った方がおられるお宅2件へも、食料等を届けた。

現地での作業は、港に山のように出された災害ゴミの分別を行った。現場は、港ということから、海からわずか数メートル。余震による津波に備え、避難経路を確認し、情報を得るためにラジオをつけっぱなしでの作業となった。ゴミは、ふとん、たたみ、家財道具などをはじめ、写真や手紙など様々。人の命をはじめ、家、思い出、歴史・・・など、津波が全てを奪い去った事を改めて実感する場所でもあった。

また、活動2日目の午後からは、布教所への家

財道具搬入ひのきしんを行い、布教所へつながる方々とも交流をもつ事ができた。

4日間を通して、余震は多くあったものの、大きな影響もなく無事にとめさせていただいた。

この度の活動に際して、お心寄せ、ご協力をいただいた全ての方々に、誌面をお借りいたしました。て、お礼申し上げます。ありがとうございました。今後は、現地の状況に合わせた活動をしていく予定です。

なお、5月15日から18日にかけて、笠岡大教会、災害救援活動第2次隊がいわきに赴きました。

物資名	数量	物資名	数量
1 お米	300kg	16 雑巾用布	多数
2 タオル	190枚	17 カップ麺	3箱+6個
3 タオル	1箱	18 文具	2点
4 タオル	3袋	19 生理用品	6袋
5 パスタオル	6枚	20 脱脂綿	1袋
6 ポケットティッシュ	1箱	21 マキロン	3個
7 成人用おむつ	3袋	22 傷テープ	3箱
8 水 (2ℓ)	77本	23 紙マスク	2箱
9 水 (500ml)	17本	24 ランドセル	15個
10 トイレットペーパー	15袋	25 ひざ掛け	1箱
11 毛布	8枚	26 割り箸	100本
12 下着	1袋	27 シャープペンシル	170本
13 ティッシュペーパー	29箱	28 センサーライト	1個
14 サランラップ	4個	29 千羽鶴	1
15 プラスチック容器	1150個	30 メッセージ帳	3冊

救援活動に参加して

陽備分教会長 虫明 立生

東日本を襲った未曾有の大震災から一ヶ月後の四月十二日、上原志郎先生はじめ有志七人は、笠岡大教会に寄せられた支援物資を、避難生活を余儀なくされている方々に直接お届けする為、福島県にある大教会直轄「いわき布教所」を目指して、夕方からマイクrobasで出発した。

この日も現地では大きな余震があり、想像できない先の見えない不安を抱えての出発となったが、翌朝十三日の八時前になんとか無事に現地入りできた。

この日宿泊させて頂く長谷川さん宅は、小高い



数々の物資を届けた



心のこもった千羽鶴を渡す



家財道具の搬入



港での分別作業

丘に位置し、地震による被害は多少あったものの津波の被害は免れた。そこで小休止させて頂いた後、長谷川さんの案内で避難所になっている学校に向かった。そこで地元自治会の方の挨拶を受け、いわき市内の小名浜にある江名漁港での作業を指示して頂いた。老人ホームに支援物資をお届けしてからは、全員で津波に流されて山積みしてある家財道具などの仕分け作業に当たった。

その夜、長谷川さんから、震災当日の津波の状況やその時の行動、そして震災後の原発での風評被害などのお話を聞かせていただいた。淡々とした口調が、かえって今回の震災が私達には到底理



解のできない、想像を絶する悲惨な出来事であることを物語っていた。

翌朝、どの家も断水状態である為、持参したポリタンクでの洗面、トイレ。全員水の有難さを感じ、普段の生活がいかに恵まれたものであったかを痛感したのではないだろうか。朝食に美味しい玉子焼きをご馳走になった後、昨日の漁港に向かった。市内の被害状況を見ながら車を走らせる。大型

漁船は打ち上げられ、住める家などない。この日、晴天の中で作業ではあったが、一時間に幾度となく感じる余震。それにもだんだんと慣れてくる。この日、漁港から眺める海は大変穏やかで、私



津波被害の様子

達人間に自然の温みをお与え下さる母なる教祖を
思わせる優しい情景の様に思えた。しかし、一旦
この海が猛威を振るうと、私達人間の力が如何に
無力なものであるかを思い知らされることにな
る・・・。

午前中の仕分け作業を終え、いわき布教所で昼
食をいただいた後、所長のご長男の、アパートか
ら布教所への引っ越しのお手伝いをし、夕食もご
馳走になってから布教所を後にした。多少なりと
も浴びている放射線を洗い流す為、途中足柄サー
ビスエリアで風呂に入った。大教会には、翌朝十



地面に押し上げられた漁船

五日七時前に到着した。

無事に帰った報告に神殿でお礼づとめ、それか
らそれぞれに感じた事を話し合い、朝食をいた
いた後、マイクロボスの清掃をして解散した。

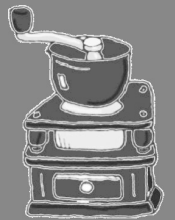
今、被災地には大勢の方がボランティアに入っ
ておられる。テレビの報道では、震災の補償問題
で首相や東電社長がやり玉にあげられている。助
かった方々が生かされた尊い命に感謝の気持ち
をいつ迄も持ち続けられる様前を見て生きていっ
てほしい。そして尊い命を失った方々の無念の思
いをしっかりと心に刻み、生かされている私達が



布教所の方々と一緒に

日々喜び勇んで不足の心を持たず、家族や地域社
会との絆を常に心に留め、引き続き支援に携われ
たらとの思いを新たにしました。

談話室



生きる喜び

川島郷分教会長 香取 雅人

3月11日午後、地震の第一報を耳にした時、申し訳のないことに最近よくある地震がまた起きたのかというぐらいの認識しかありませんでした。翌日には個人的に大きな行事を控えていましたし、落ち着いてテレビを見る余裕もありませんでした。

今から思えばあの時間、想像を絶する巨大な津波が東北、関東地方の太平洋沿岸を直指して何波も押し寄せていたに違いありません。その後の報道によって映し出された光景は現実のものとは到底信じられず、まさに目を覆いたくなるような惨状でした。人々が長い歳月を掛けて築き上げてきた「暮らしの場」と多くの尊い命が一瞬にして、地震と津波によって奪われてしまい、見渡す限りががれきの山に変わり果てていました。

さらに被災した原子力発電所からは放射性物質が飛散し、膨大な数の人々とその関係者が甚大な被害を受けています。また、危うく難を逃れた十数万人の人たちも避難所での不自由な生活を余儀

なくされ、不安な毎日を送っておられます。

しかし、このような未曾有な大震災に遭い過酷な状況にありながらも略奪や暴動はおきず、整然と列をして待ち、僅かな食料を分け合う人々の姿は海外メディアからも絶賛され、同じ日本人としてとても誇りに思います。

家族も家も友人・知人も仕事も何もかもなくし、涙さえ枯れ果てた方々のことを考えると、同じ国に住みながら幸運にも被災しなかった者が、生きる喜びについて話すことはおこがましいと思えます。ただ、このような悲惨な状況の中からも心温まるドラマや奇跡的な出来事が起こり、人間って本当に素晴らしいなあと改めて感激しています。

宮城県石巻市で震災発生から10日目に救助されたおばあちゃんとそのお孫さんの奇跡の生還もその中の一つです。二人は地震直後の津波に襲われ、自宅台所のせまい空間に閉じ込められました。厳しい寒さと空腹と絶望感に耐えられたのは、偶然開いていた冷蔵庫に残っていた僅かな食料のお陰だけではなく、お互いを思いやる優しさと家族の絆だったに違いありません。

祖母はかわいい孫を励まし、孫は足の不自由な祖母をいたわって、お互いがたすけ合ったからこそこの過酷な状況に耐え、生き伸びることができたのだと思います。今回の大震災では死者、安否不明者の合計が3万人近くにも及んでいます。その中で、この二人の救出劇だけを喜ぶことは差し控えなければならぬでしょう。

ただ私は、救出直後に訴えたというこの男子高校生の言葉を伝えたいのです。

救助を求めて先に助けられ顔面蒼白で震えていた彼は「おばあちゃんが中にいる。助けてほしい」と絞り出すような声で訴え、救助隊の巡査部長が手渡そうとしたカイロとお菓子を決して受け取ろうとしなかったというのです。9日間も飢えと寒さに震え、極限の状況まで追い詰められていたにもかかわらずです。自分のことよりも先に祖母を心配するこの究極の優しさに感動したのです。

現代の日本社会は「無縁社会」とまで言われるほど家族や地域とのつながりの薄い社会に変貌しつつありました。迷惑さえかけなければ何をしてもいいという考え方が横行し、助け合って生きることや地域との関わりなど煩わしいとさえ思う傾向があったのです。だから「家族だんらん」とか「家族の絆」などいうものは、古臭くて無用な長物として倉庫の奥深くしまい込まれているかのようでした。

私はかつて、幸せとは何かと尋ねられ、「家族そろって楽しく夕食を食べられることだ」と答えたことがあります。そんな些細なことが幸せなのかと、怪訝そうな表情を浮かべる人もいましたが、ただ一人だけ共感してくださった人がいました。「そうじゃ。そのとおりじゃ」と、顔のしわの一筋一筋に数多くの経験が刻み込まれたような笑顔でしみじみとおっしゃいました。先の大戦を生き延び、戦後の食糧不足の中、大勢の家族を抱え懸

命に生き抜かれた方の一言でした。

当たり前なのですが、食べ物があれば食べられません。平和な国があり家族がいて、食べてゆける収入があり、重大な心配事や悩みがなく、家族の誰もが大きな病気にかかっておらず、しかも円満である。これらのどれひとつがなくても家族そろって楽しく夕食を摂ることができないのです。当たり前に見えることが実は難しいことなのです。

しかし、ただ単に家族が集まり、愛想笑いを浮かべているだけでは、仮面の家族でしかありません。本当の団欒とは自分以外の人のために祈り、他の人の助かりを願う心。この心を基にした人と人とのつながりなのです。たとえ病気があっても、家族が遠くに離れていても、いたわり合い助け合う心があれば、本当の家族だんらんがそこにあるのではないのでしょうか。

私たちは幼いころから人に迷惑をかけないようにと厳しく言われ育てられてきました。このことは社会の秩序を守る上でとても大切なことだと思います。お互いが他人の迷惑を顧みず好き勝手なことをしていたのでは、安心して暮らすことができないからです。ただ、ここでいう迷惑をかけるなというのは、他人への思いやりを持つという意味だと思います。

人は一人では、決して生きていきません。そして生きていく限りは、迷惑をかけずにはいられないのです。言いかえれば一生、誰かのお世話にな

らなければならぬのです。だからこそ、自分も御恩を返していく、あるいは恩をほかの誰かに送ってあげたいのだと思います。そこにお互いさまの精神が生まれ、助け合っていく姿が見えてくるのではないかと考えるのです。

生きる喜びとは、心がつながり合っていること、自分がほかの誰かから必要とされていることを感じることもありません。

教祖誕生祭

「おかえり講話」実施

4・17

布教部

布教部(中村剛部長)は4月17日、午後7時から約1時間、詰所修煉場で、加藤芳樹先生(中河大・大海里分教会長)を講師に迎え、「おかえり講話」を実施、宿泊者など約100人が参加した。

先生は、まず「3月11日の大震災から、お道の者としてただ事ではない。何かさせてもらわなければいけないと思う」と前置きされ「先程、東講堂で講演をさせて頂いていると、聴衆の中の一人の男性(布教所長)がマイクを取って『昨日、宮城県気仙沼から来ました。皆様にお礼を言わせて下さい』と言われました。事情を聞いてみると、津波の中から命拾いましたこと、12・13・14日と本部

神殿でお願いづとめをして下さって有難うございました、ということでした。こういう思いをしておどばに帰られている私達の仲間がいる。この機会に私達は自分の生き方と、これからの方向性を軌道修正する必要がある」と話され、また、

「このせかい山ぐゑなそもかみなりも
ぢしんをふかせ月日りいふく

(六九一)

のおふでさきを挙げられ、天理時報(3月20日付)に掲載された表統領のメッセージを引用し「天災は親神様の立腹の現われではあるが、被災された方に対してではなく、世の有り様に対しての警告と考えられる。被害に遭わなかった方も我がこととして受け止めて思案しなければならぬ。」と話された。

更に現在の社会、また家庭生活を例に挙げて、人間同士の関わりの薄さを指摘。

「これを打開していくため今、私達に出来ることは、お道の教えを通して教祖からいじらしいと応援して頂ける様に通じ、誠を捧げること。そして、親子、家庭、地域社会が助け合うこと。一人一人は微力だが無力ではない。微力を結集すれば必ずこれからの時代の軌道修正と、大震災の被災地の方々の復興への芽生えにもつながっていく」と強調された。

加藤先生プロフィール……境市青少年指導委員・

国際協力活動「未来ある子供達に鉛筆を」の活動リーダー。昭和23年8月25日生まれ。

◆天理時報の増部

布教部

各教会2部増部を目標に

◆笠岡支部委員部長後継者講習会

婦人会

【と き】 5月31日(火) 午前9時30分～
 【場 所】 大教会
 【内 容】 支部長様お話、神名流し、ねりあい

◆おやさとふしんひのきしん隊

青年会

【期 間】 6月1日～24日
 【対 象】 高校生以上で朝づとめよりつとめられる元気な男子 入隊目標——14人
 【集 合】 5月31日中に詰所
 *詳細は委員長 上原繁次まで(0865-66-3349)

◆R174 こかん様に続く会

婦人会 女子青年部

おぢば開催の女子青年大会を目指し、
 一人でも多くの女子青年に笠岡大教会へ集まって頂きたいと思います。
 テーマも、少しずつ成人できるよう、3回に分けて設定しました。
 たくさんのご参加をお待ちしております。

プログラム ♡ 信仰のなぜ?を解決します!!

【と き】 6月4日(土)・5日(日)
 【場 所】 大教会
 【内 容】 6月4日 13:00 受付開始
 30 開講・オリエンテーション・ゲーム・ひのきしん
 16:30 支部長様お話・夕食(手まきずしパーティー)
 19:30 夕づとめ・花火大会
 5日 5:00 朝づとめ・朝食・ねりあい
 10:15 支部長様 質疑応答
 11:00 チーム対抗「ごうかデザートそうだつ戦!!」
 13:00 閉講式

【参加御供】 500円
 *どちらか1日だけでも来て下さった方が参加した!! と思って下さるよう、
 半日ずつのプログラムにさせて頂きました。

◆別席ひのきしん団参

実行委員会

【と き】 6月25日(土)～26日(日)
 【内 容】 25日 13:00 神殿にておつとめ、別席
 終了後 境内地ひのきしん ※雨天時は回廊拭き
 19:00 記念講演(詰所)
 講師・川島一郎先生
 (甲賀大・勢津分教会長・三日講習会講師)
 26日 午 前 本部月次祭参拝
 午 後 別 席

○本年の心定め完遂に向けて行われるもので、参加目標は1,000人。

○ひのきしん担当者(敬称略)

- | | | | |
|---------|------|----------|------|
| ・東ブロック | 三島 衛 | ・西ブロック | 横山逸郎 |
| ・福山ブロック | 平盛秀年 | ・高屋ブロック | 矢田哲一 |
| ・島根ブロック | 三代 幸 | ・久松ブロック | 渡邊泰造 |
| ・上下ブロック | 高田一弘 | ・府中市ブロック | 山田睦浩 |

○スタッフは腕章をつける。

四月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます

親神天理王命の御前に 会長上原理一慎んで申し上げます

親神様には一列子供の陽気ぐらしを楽しみに 十全の御守護により火水風をはじめ立毛一切をお与え下され身体の自由も御守護下さって常に陽気ぐらしを味わえるようにとお働き下さっております事は誠に有難い極みでございます 加えて天保九年十月 人間を御創造下されるに当り 母親の役をおつとめ下さったいんねんある魂の持ち主である教祖を 月日のやしろとお定めになり万一切をお明かし下され ひながたを通して陽気ぐらしへ向かう成人の歩みをお教え下さいました事は誠に勿体ない限りでございます 私共は成って来る理に親心を思案しその親心に応えるべく日々は朝夕に御礼申し上げると共にそれぞれの持ち場立場を生かしつつ たすけ一条の御用の上に勤め励ませて頂いております そんな中この月十八日は教祖御誕生祭でございますので誘い合わせておちばに帰らせて頂き教祖二百十三回目の御誕生日を御祝いさせて頂き慶びのひとときを味わわせて頂きました引き続き本日は此の笠岡大教会の御祭日でございますので 只今からおつとめ奉仕人一同喜び心も一入に明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて四月の月次祭を執り行わせて頂きます 御前には年度初めでもあり婦人会総会後の慌ただしさも厭いませず今日の日を楽しみに寄り集いました道の子供達が相共にお歌を唱和し日頃の御高恩に改めて御礼申し上げる状を御覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

また東日本大震災で被災された人々の復興もお陰によりまして僅かずつ進んでおりますが毎日のように起こる余震や原子力発電所の事故により 思うように伸展しておりません 一日も早く復興するためにも余震や事故をお治め下さいますようお願い申し上げます

さて来る二十九日は全教一斉ひのきしんデーでございます よふぼく信者一手一つになって日頃の喜び感謝の心を込めてひのきしんに励ませて頂きます 又震災を通して教えて頂いたたすけ合いの心を現地へ赴き 物資や救援ひのきしんとして届けさせて頂くのはもちろんですが 日常生活の中で よふぼくとして身近の人へ「世界一列救きたい」との親心と生かされている喜びを伝えるべくたすけ一条の御用の上に邁進させて頂く所存でございます

何卒親神様には親孝心一筋に御恩報じに徹する皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして万たすけの上から自由の御守護を賜り親心に触れる人が弥増し喜び感謝の心に満ち溢れて よろづ互いがたすけ合う陽気づくめの世の状に一日も早くお導き下さいますよう 一同と共に慎んでお願い申し上げます

・原・稿・募・集・

内 容

①小随筆 ②教会・布教所の独自の活動の紹介 ③俳句・和歌・川柳 ④教会行事開催後の報告記事 等々

字 数

1000字前後(800字~1200字) 題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。俳句等は1句からでも結構です。

寄 稿 先

下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。

郵 便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江377

FAX：0865-66-1314

メール：tenkasa@yahoo.co.jp

尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。



大教会だより

Ⅱ 辞令 Ⅱ

立教174年1月21日付

准承事	田中隆之
"	田林久嗣
"	虫明立生
おつとめ奉仕人	笹尾一美

◎職制人事

会計部次長 佐藤道孝

"	三島照美
"	高木孝子
"	横山小智榮
"	中村初美

立教174年4月21日付

"	陶山 上原宏恵
"	至 立教174年5月1日
"	自 立教174年4月27日

◎登用

幹部承事 中村邦義

◎教人資格講習会修了者

承事	中村 剛
"	杉原博之
"	上原志郎



こころの詩

▼養徳社発行『陽気』誌五月号、「道柳」より転載

▽今回の課題は「幸」、笠岡に繋がる教友の方が選ばれ掲載されて
いましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

佳 詠 東悠分教会前会長夫人 田林美智子さん

拝み合う諸人の幸甘露台

▼表紙の書

天場山分教会 役員 野津正樹さん

◎教会長資格検定講習会修了者

立教174年4月19日終講

大江橋	三宅義章
芦常	原裕美

◎本部食堂ひのきしん

自 立教174年5月1日

至	立教174年5月15日
東福山	井上正和



教会長就任から五年目の今思うこと。

就任を決意するまでの私は、教会長になりたくないが故に、その事から逃避し、世間の悪しき習慣に流れる事で無言の抵抗をしていたように思う。身を崩している時には、埃の心が充滿している状態で、教理的な話は受け入れられずにいた。
当時は、自分の行動を肯定したいが為の甘えから、神様から見せられる事が、助かる道筋をおつけ下され

ているとも悟れず、自分の置かれている状況を悉く他人の所為にして、自分に都合の良い狭い考えで行動していた様な気がする。今思えば恐ろしい限りである。

ある人の話で、「生きるとは人に恩を受ける事で、生きてゆくというのは人に恩返しをする事だ」と聞かされた。この言葉が、我が身を省みる大きな契機になったと言っても過言ではない。

報恩感謝の心を忘れず、人に恩返しをしていく事が、生きていく上での使命と肝に銘じ、これからの私の人生を全うしたいと思っている。

(む)

